

01

イベント どうなる!?どうなった!? 2016年のノーベル賞

未来館の科学コミュニケーターたちと一緒にノーベル賞を100%楽しもう

日本科学未来館では、ノーベル賞の受賞者や受賞テーマを解説するイベントを毎年開催しています。今年も、発表前には「受賞にふさわしい人やテーマ」についての予想を、発表

後は受賞者とその研究の意義について、パネル展示やミニトーク、ブログで紹介しました。科学コミュニケーター (SC) たちとともに発表の瞬間を迎えるインターネット番組 (ニコニコ



生放送) は特に注目され、視聴者は連日2万5,000人を超えるほど。「素早くかゆいところに手が届く」情報発信をめざしたイベントの舞台裏を、SCの石田茉莉奈さんに伺いました。(JST広報課・松山桃世)



科学コミュニケーター 石田 茉莉奈さん

ノーベル賞は、「人類のために貢献した人」に贈られます。身の回りの物はどれも、誰かがアイデアをひらめき、実用化まで工夫を重ねてできたもの。未来館では、私たちの生活に役立つ科学技術を世の中に広く紹介する絶好のチャンスと考え、自然科学3賞(生理学・医学賞、物理学賞、化学賞)の受賞内容や波及効果を伝えています。

今年の生理学・医学賞は東京工業大学の大隅良典栄誉教授に決まりましたね。実は昨年、受賞者候補として紹介していました。受賞決定、おめでとうございます。

ノーベル賞担当チームは何人いるの?

コアメンバーは生理学・医学賞が4人、物理学賞が3人、化学賞が3人。各賞に係る専門性を持ったSCが担当しました。この他に、先輩がメンターとして活躍。短い任期の中で、先輩から後輩へと技を伝承する場になっています。

今年の候補者は?

今年はこんな研究を紹介しました。

- 【生理学・医学賞】
- 遺伝子治療の概念の提唱とその臨床応用
セオドア・フリードマン博士(米) / アラン・フィッシャー博士(仏)
 - アレルギー反応機構の解明
石坂公成博士(米) / 坂口志文博士(大阪大学)
 - 不良品たんばく質の検品機構の解明
ピーター・ウォルター博士(米) / 森和俊博士(京都大学)

- 【物理学賞】
- 量子テレポーテーションに関する先駆的研究
チャールズ・H・ベネット博士(米) / ジル・ブラッサール博士(加) / ウィリアム・ウーターズ博士(米) / 古澤明博士(東京大学)
 - アト秒物理学の発展に対する貢献
ポール・コーカム博士(加) / フェレンツ・クラウス博士(独)
 - 重力波の発見に対する貢献
レイナー・ワイズ博士(独) / キップ・ソーン博士(米) / ロナルド・ドリーバー博士(英)

- 【化学賞】
- ドラッグデリバリーシステムへの貢献と組織工学の提唱
ロバート・ラング博士(米)
 - 本多・藤嶋効果(酸化チタンの光触媒能)の発見
藤嶋昭博士(東京理科大学)
 - 自己組織化分子システムの創出および応用
藤田誠博士(東京大学)
- 詳しくは科学コミュニケーターブログをご覧ください。
<http://blog.miraikan.jst.go.jp/>

予想に参加できる?

展示フロアに、候補者を説明した予想パネルを置きました。ミニトークやブログを見て、シールで投票できます。自分が担当する候補者に1票が入るとひそかに喜んでいました。



ノーベル賞担当チームの活動スケジュール

5月	ノーベル賞担当チームメンバー募集
6月	各賞担当チーム発足
7月	チームごとにリサーチを進める 候補者決定
8月	80を超える夏休みイベントを盛り上げながら、ブログ記事の執筆も進める
9月	5日 ノーベルブログ開始 計9本の記事を公開 通常は1カ月かかるところ、1週間でミニトークを作成
10月	18日 ミニトーク開始 3日~5日 受賞者の発表を生中継 当日中に受賞ブログ公開 翌日から受賞ミニトーク開始

どうやって候補者を決めているの?

通称・候補者決定プレゼン大会で、SCが研究者やテーマを推薦し、その中から候補者を選びます。研究者の実績はもちろん、発表するSCの熱意とプレゼン力も重要!

テーマは、幅広い分野から選びます。私たちの生活に直接役立つ成果や、科学者が研究を進める上で役立つ手法の開発などが候補になります。物理だけは特殊で、新しい世界観を生み出した研究も紹介しています。科学技術に注目が集まる貴重な機会なので、これまでに未来館で紹介したことがない分野も選ぶようになっています。実績の評価には、ウルフ賞やラスカー賞など、著名な科学賞の受賞歴も参考にします。未来館に代々受け継がれる秘蔵の候補者リストもあるんですよ。

予想が難しいのは何賞?

文句なしに化学賞です。分野が幅広く、身近な製品に結びついた研究もたくさん。未来館では、受賞者を当てることより、紹介したい研究を選んでいきます。

受賞者決定の瞬間をどう迎えるの?

連日、午後5時から7時半ごろまで生中継を行いました。受賞者が発表されたらすぐに手分けをして、研究内容を調べ、わかりやすい説明の流れを組み立て、素材を集めます。どちらを向いても必死の形相と激しい議論が繰り広げられ、まるで戦場のよう。その日のうちにブログを公開し、翌開館日からミニトークを行いました。終電を気にしながらの準備でした。

連日の発表で疲れはたまりませんが、気力で受賞後のミニトークも乗り切りました。受賞者が日本人でなくても興味を持って聞てくれるお客さまが多く、励まされました。



生中継の様子。

今年は、9月23日に受賞者が発表されたイグノーベル賞の紹介にも力を入れました。ユニークな着眼点や発想、実験のプロセスには、科学の魅力が詰まっています。科学を面白いと思っただけは、たいてい身近な現象への疑問。イグノーベル賞は、そこから一歩踏み出そうと背中を押してくれます。

来年もぜひ、ノーベル賞・イグノーベル賞と一緒に楽しみましょう!

02

話題 経営企画部国際戦略室、国際科学技術部、科学技術プログラム推進部

希望の大陸・アフリカに科学技術を継続支援

第6回アフリカ開発会議(TICAD VI)が、ケニアで8月27・28日に開催されました。1993年に始まって以来、初のアフリカ開催であり、アフリカ53カ国、開発パートナー諸国やアジア諸国、国際機関、地域機関の代表並びに民間セクターやNGOなど市民社会の代表、約11,000名以上が参加しました。JSTからは濱口理事長、伊藤副理事ら、6名が本会議と関連イベントに出席しました。

濱口理事長は、STS フォーラム主催ワークショップの講演で「JSTは科学技術イノベーション(STI)で、持続可能な開発に貢献しており、アフリカ諸国とはSATREPSプロジェクトで現在までに17カ国、30件を実施。2016年以降も総額約25億円を支援します。2016年度に新たに採択した4件については、今後5年間で総額20億円を支援する予定です。さらに、これまで採択に至っていないア

フリカの国々の準備段階を支援する仕組みを検討しています。人材育成にも力を入れており、アフリカ諸国から日本に研究者・学生延べ447人を受け入れ、日本からは延べ1362人の研究者・学生を派遣しました。今後もSTIを通じて、アフリカの持続可能な開発に貢献していきたい」と、さらなる協力を強調しました。同ワークショップでは安倍晋三総理大臣も基調講演を行いました。

8月26日には別会場でSATREPSシンポジウム「アフリカにおける科学技術協力の意義と課題・研究から開発へ」が開催され、伊藤副理事がSATREPSのプログラム概要、アフリカとの協力実績、今後の取り組みなどについて発表し、「日本はアフリカなどの技術革新を助ける枠組みを持っている。今後も拡大したい」とのメッセージを発信しました。

シンポジウム会場ではSATREPSの紹介

映像の放映や、アフリカ各国の実績を特集したパンフレットの配布、共同研究を紹介するポスターが展示されました。

シンポジウムではSATREPSのアフリカ側共同研究者らから感染症や気候変動における研究成果の社会での実用事例や、人材育成の取り組みが紹介され、日本とアフリカの科学技術協力を推進する有効なツールとしてSATREPSの重要性が確認されました。

さらに、JSTの取り組みのひとつとして、西坦隆プログラム主管よりSTI-COPP, Africa(「途上国におけるイノベーションを促進する国際協力の戦略的推進」プログラム・文部科学省からの受託事業)で推進し、実用化に向けた成果が具体的に見えつつある拠点協力プロジェクトの紹介がありました。



TICAD VI 全体会議の様子。(安倍晋三内閣総理大臣、ケニヤッタ・ケニア大統領、デビー・イトゥノ・チャド共和国大統領が共同議長を務めた。)



TICAD VI STSフォーラムワークショップで講演をする濱口理事長。セッションの司会も担当。



SATREPSシンポジウムで講演をする伊藤副理事。



第6回アフリカ開発会議の会場。